

ワークショップのご案内

ワークショップ 1,2,6,8 は事前申込制です。そのほかのワークショップは事前参加申込はございません。席数に限りがありますので、ご参加の先生はお早めに会場にお越しください。参加者は原則として、最初から最後まで聴講できる方に限ります。途中の入退場はご遠慮ください。

ワークショップ						
	テーマ	コーディネーター	月日	時間	会場	産/単位
1	複雑事例を通して学ぶ自殺予防の エッセンシャルズ (自殺予防に関する委員会)	大塚 耕太郎 太刀川 弘和 成田 賢治	6月20日(木)	10:00-12:40	L 会場	
2	対応困難例における効果的なりエゾンとは ーより早期から、幅広く、能動的にー	柏木 智則 五十嵐 江美	6月20日(木)	13:25-15:05	E 会場	
3	精神科医が脳波を学ぶ～基礎と臨床～	矢部 博興 山内 俊雄 原 恵子	6月20日(木)	15:40-17:20	E 会場	
4	うつ病を有する女性患者の妊娠・出産にどう対応 するか? ～模擬症例を通して考える～	渡邊 衡一郎	6月21日(金)	8:30-10:10	L 会場	
5	児童精神医学の作法と学び方 ー新たに児童精神医学を志す人のためにー (児童精神科医療研修委員会)	岡田 俊 小野 和哉	6月21日(金)	10:45-12:25	L 会場	
6	リエゾン精神科医が直面する臨床倫理的課題 ー周産期メンタルヘルスの現場からー	根本 康 竹内 崇	6月21日(金)	13:25-15:05	L 会場	
7	統合失調症心理教育ワークショップ ～上手な診察の受け方のコツ(うけコツ)～	橋本 直樹 市橋 香代	6月21日(金)	15:40-17:20	L 会場	
8	措置診察実践セミナー (平成 30 年ガイドライン・令和 5 年法改正準拠)	藤井 千代 田所 重紀	6月22日(土)	8:30-10:10	L 会場	
9	そこが知りたい! 刑事精神鑑定のコツ (司法精神医学研修委員会)	田口 寿子 今井 淳司	6月22日(土)	10:45-12:25	L 会場	
10	映像で学ぶ初診面接 ー薬物療法を拒む/望まない患者編ー (精神療法研修委員会)	今井 淳司 菊地 俊暁	6月22日(土)	13:15-14:55	L 会場	



コース内容紹介

1

複雑事例を通して学ぶ自殺予防のエッセンシャルズ (自殺予防に関する委員会)

6月20日(木) 10:00-12:40 L会場(札幌コンベンションセンター 2F 207会議室)

司 会	(岩手医科大学医学部神経精神科学講座) (札幌医科大学医学部神経精神医学講座)	大塚 耕太郎 河西 千秋
講 演 者	(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所) (岩手医科大学医学部神経精神科学講座) (筑波大学医学医療系災害・地域精神医学) (札幌医科大学医学部神経精神医学講座) (札幌医科大学医学部神経精神医学講座)	張 賢徳 大塚 耕太郎 太刀川 弘和 成田 賢治 津山 雄亮
メインコーディネーター	(岩手医科大学医学部神経精神科学講座)	大塚 耕太郎
サブコーディネーター	(筑波大学医学医療系災害・地域精神医学) (札幌医科大学医学部神経精神医学講座)	太刀川 弘和 成田 賢治

本ワークショップは自殺予防委員会の企画により、メンタルヘルス・ケアと自殺予防のための教育モジュール、10 Essentials (テン・エッセンシャルズ) を用いて、メンタルヘルス不調者、ないしは精神疾患患者の自殺リスクの網羅的把握、自殺の切迫性の判断、そして、それらを踏まえた自殺リスクを有する患者に対する適切、かつ包括的な対応を習得することを目的としています。患者、あるいはメンタルヘルス不調者の自殺予防は、精神科医療の中でも最も重要であり、最も難易度の高いものです。自殺と精神疾患の関連は密接であり、自殺予防対策に関する法規、大綱等においても、精神科医の自殺予防対策への関与が強く求められています。医学・保健・福祉教育において卒前・卒後のいずれにおいても系統的に自殺予防学を学ぶ機会ほとんどなく、精神科医を含む保健福祉専門職の多くが自殺関連行動への対応について知識・技量の不足を自覚し、困難感を感じていることが調査により明らかにされています。当該研修会では、自殺リスクを抱える複雑事例について、自殺予防対策の専門家によるレクチャーが行われ、その上で、所定の教育モジュールを用いた系統的な症例検討をグループディスカッション方式で行います。2時間半程度を見込んでいます。ファシリテーターは、実際に自殺予防医療に従事する多職種が務めます。専門家によるファシリテーションと双方向性学習により、受講者は自殺ハイリスク症例についてリスクアセスメントと問題解決アプローチの知識と技量を多様な観点から学び、習得することができます。なお、この研修プログラムは、全国の地域自殺対策で活用され、また、日本自殺予防学会総会と日本うつ病学会総会で実施され、当学会では毎年恒例となっており、毎回満席で高い満足感を得ています。

2

対応困難例における効果的なリエゾンとは
—より早期から、幅広く、能動的に—

6月20日(木) 13:25-15:05 E会場(札幌コンベンションセンター 1F 104+105会議室)

司 会	(札幌医科大学医学部神経精神医学講座) (東北大学大学院医学系研究科精神神経学分野)	柏木 智則 五十嵐 江美
講 演 者	(新見公立大学健康科学部看護学科) (岩手医科大学精神科神経科学講座) (札幌医科大学医学部神経精神医学講座)	井上 真一郎 福本 健太郎 石橋 竜太郎
メインコーディネーター	(札幌医科大学医学部神経精神医学講座)	柏木 智則
サブコーディネーター	(東北大学大学院医学系研究科精神神経学分野)	五十嵐 江美

コンサルテーション・リエゾン精神医学は、コンサルテーションとリエゾン精神医学に大別される。総合病院精神科において、コンサルテーション・サービスとは、身体科主治医からの相談を受けて精神科従事者が対応するという、いわば受動的な活動であるのに対し、リエゾン・サービスは、精神科従事者が身体疾患のチーム医療の一員として関与する活動である。患者さんを中心においた現場の協働医療、あるいは院内の精神保健の推進の観点からすると、後者は非常に重要な活動となるが、しかし、前者に大きく偏りがちとなっているのが実状である。本ワークショップは、リエゾンの真の意味に立ち返り、「より早期から、幅広く、能動的に」をキーワードに、疑似症例を通して、リエゾン・サービスについて学び、その意義を共有することを目的とする。ワークショップは、コンサルテーション・リエゾン精神医学の専門家によるレクチャーと事例検討から構成される。そして、真にリエゾン・サービスを求められる、「自殺未遂症例」と「周産期メンタルヘルス不調症例」の事例検討を行う。ファシリテーターを、コンサルテーション・リエゾンに従事する専門多職種が務め、専門家によるファシリテーションと双方向性学習により、参加者は精神医療従事者としての知識を深め、専門的な介入スキルを高めることができる。リエゾン精神医学の現場は総合病院精神科だけに留まらず、地域リエゾンを実践している精神医療従事者や地域保健従事者もあることから、本研修会は、精神科専門病院や地域保健機関に勤務する専門職をも対象とする。



3 精神科医が脳波を学ぶ～基礎と臨床～

6月20日(木) 15:40-17:20 E会場(札幌コンベンションセンター 1F 104+105会議室)

司 会 (福島県立医科大学・こころと脳の医学講座) (原クリニック)	矢部 博興 原 恵子
講 演 者 (福島県立医科大学・こころと脳の医学講座) (原クリニック) (埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科) (東京医科歯科大学精神行動医科学分野)	矢部 博興 原 恵子 渡邊 さつき 高木 俊輔
メインコーディネーター (福島県立医科大学・こころと脳の医学講座)	矢部 博興
サブコーディネーター (埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科) (原クリニック)	山内 俊雄 原 恵子

以前にはてんかんは三大精神病の一つとされ、多くの精神科医がてんかん診療に重要な検査である脳波判読を日常的に行っていた。多くの医局において生理学・脳波を専門とする医師が在籍していたが、近年の精神科研修では、てんかんや脳波判読を学ぶ機会が減少し、その指導を受ける機会が失われつつある。その結果、精神科分野において、そもそも脳波検査の意義を知らなかったり、検査のオーダーがされにくくなったりしている可能性がある。一方で脳波検査を含めた生理学的検査は、てんかん、非けいれん性てんかん重積、昏迷、解離性障害をはじめとする精神症状、軽度意識障害、認知症、せん妄、睡眠障害等との鑑別において重要な検査であり、現在においても脳波は精神科医に必須の知識・技能であることと認識されている。近年では critical EEG も話題となっている。本企画は、精神科医が、臨床において脳波検査を活用するようになることを目的として企画した。画像診断等が向上している現在、なぜ精神科医が脳波判読を学ぶ必要があるのかを再認識し、脳波判読の基本的知識を短時間で学ぶことで、脳波判読への足掛かりとなることを期待する。本セッションでは、前半で脳波判読の基本的な考え方・読み方と、初心者が抑えておきたい所見を提示する。後半ではより臨床的に、実際の症例提示をしながら、どのように脳波検査を臨床に役立てていくのか、精神科における脳波検査の意義について、症例を交えて議論する予定である。

4

うつ病を有する女性患者の妊娠・出産にどう対応するか？
～模擬症例を通して考える～

6月21日(金) 8:30-10:10 L会場(札幌コンベンションセンター 2F 207会議室)

司	会 (兵庫医科大学精神科神経科学講座) (岩手医科大学精神科神経科学講座)	山田 恒 福本 健太郎
講 演 者	(琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座) (福岡大学医学部精神医学教室) (東北大学病院精神科) (ママブルーネットワーク)	高江洲 義和 飯田 仁志 菊地 紗耶 宮崎 弘美
メインコーディネーター	(杏林大学医学部精神神経科学教室)	渡邊 衡一郎

周産期メンタルヘルス領域の研究が進み、妊娠・授乳と向精神薬についてのエビデンスが蓄積してきているが、精神疾患を有する妊産婦への対応に苦手意識をもっている医療者は未だに多い。本シンポジウムでは、「うつ病を有する女性患者の妊娠・出産にどう対応するか？」をテーマとして扱う。具体的には、①抗うつ薬中止を希望するうつ病患者に対するSDM (Shared Decision Making)、②プレコンセプションケア、③妊娠中のうつ病増悪時の対応、産後の女性が利用できるリソースについて学ぶ場とする。各シンポジストの発表に先立ち、架空症例ならびに検討事項を提示する。QRコードを利用し聴講者の意見を会場で集計し、聴講者と共有した上で、どう対応していくかをシンポジストが説明をする双方向的なシンポジウムとする予定である。



5

児童精神医学の作法と学び方—新たに児童精神医学を志す人のために—
(児童精神科医療研修委員会)

6月21日(金) 10:45-12:25 L会場(札幌コンベンションセンター 2F 207会議室)

司 会	(奈良県立医科大学精神医学講座) (聖マリアンナ医科大学神経精神医学教室)	岡田 俊 小野 和哉
講 演 者	(聖マリアンナ医科大学神経精神医学教室) (東邦大学医学部精神神経医学講座) (弘前大学大学院保健学研究科総合リハビリテーション科学領域) (岡山県精神科医療センター)	小野 和哉 船渡川 智之 斉藤 まなぶ 大重 耕三
メインコーディネーター	(奈良県立医科大学精神医学講座)	岡田 俊
サブコーディネーター	(聖マリアンナ医科大学神経精神医学教室)	小野 和哉

児童精神科医療研修委員会では、児童精神医学を学ぼうとする若手医師、あるいは、児童精神学の知識を深めようとする精神科医を対象に研修の機会を提供することを活動の主軸においている。本ワークショップでは、このような委員会の趣旨に基づき、「児童精神医学の作法と学び方」と題する一連の研修を企画した。児童精神医学が精神医学と異なる点は、単に対象となる年代だけではない。その子どもがもつ特性に加えて、養育者をはじめとする生育環境や仲間関係、そこで経験する多様な出来事の中で、子どものこころや病理が育まれていく。子どもや養育者との面接、生育歴や病歴の聴取、心理検査など、多面的な情報を組み合わせながら子どものこころの姿を多面的に描き出していく。そのプロセスはまさに「関与しながらの観察」であり、医師とのかかわりのなかでより鮮明に描出されていくのであるし、そのプロセスも治療的といえよう。同時に、子どもへの治療が医療におけるかかわりのみではなく、教育や福祉など多面的な支えを活用することが肝要である。本ワークショップをとおして、児童精神医学の基本姿勢を学ぶことが出来るように企画した。

- 1 児童精神医学のマインドとは何か —児童精神医学のルーツを踏まえて—
小野 和哉 (聖マリアンナ医科大学)
- 2 児童精神科初回面接のコツ —子どもを知り、親を安心させる—
船渡川 智之 (東邦大学)
- 3 児童症例適正診断のコツ —様々な情報や所見から事例を多面的に解き明かす—
斉藤 まなぶ (弘前大学)
- 4 上手な連携スタイルの作り方 —多職種連携と地域連携を活用する—
大重 耕三 (岡山県精神科医療センター)

6

リエゾン精神科医が直面する臨床倫理的課題
－周産期メンタルヘルスの現場から－

6月21日(金) 13:25-15:05 L会場(札幌コンベンションセンター 2F 207会議室)

司 会	(さいたま市立病院精神科) (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科精神行動医科学分野 リエゾン精神医学・精神腫瘍学担当)	根本 康 竹内 崇
講 演 者	(兵庫医科大学精神科神経科学講座) (東京大学医学部附属病院心療内科 / 患者相談・臨床倫理センター) (東京アドヴォカシー法律事務所) (東京女子医科大学医学部精神医学講座)	清野 仁美 瀧本 禎之 池原 毅和 西村 勝治
メインディネーター	(さいたま市立病院精神科)	根本 康
サブディネーター	(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科精神行動医科学分野 リエゾン精神学・精神腫瘍学担当)	竹内 崇

統合失調症や認知症などの精神疾患患者が身体疾患に罹患した場合、病識の欠如や否認などによって本人の意思決定能力が損なわれ、医学的に必要とされる治療（例えばがんの根治的手術）を拒否することがある。この場合、身体疾患に対する医療チームは時間的猶予がない中で、患者や家族とコミュニケーションを取りながら、治療選択を決定しなければならず、患者家族の意向と医学的必要性、あるいは強制的な医療などとの間で倫理的葛藤が生じるケースも少なくない。リエゾン精神科医には医療チームから問題解決に向けた援助が要請され、その期待はリエゾン精神科医にも強い倫理的葛藤を生じさせる。このような状況でリエゾン精神科医が行うべきは、患者の精神症状の評価や治療のみならず、直面する葛藤状況を回避することなく医療チームと共有し、患者家族と向き合うための援助である。リエゾン精神科医は自身の逆転移にも目を向け、医療チームの力動にも配慮しながら話し合いを促進させ、医療チームが感じる不安を明確にしていく。最終的には検討すべきポイントが明らかとなり、医療チームが進むべき方向性が定まることが多い。もちろん、医療チームが行った臨床判断が必ずしも正解とは限らず、唯一の正解も存在しない。しかしリエゾン精神科医の働きかけにより潜在的であった倫理的葛藤が浮き彫りになり、医療チームが納得して臨床的決断を下すことが可能となる。

本ワークショップは、コンサルテーション・リエゾン・サービスの極意の共有を目的として日本総合病院精神医学会の専門医制度委員会が毎年行っている。本年は臨床倫理の基本的な考えを確認した上で、周産期メンタルヘルスに関連した1症例の意思決定支援と倫理的問題について参加者同士でグループワークを行って理解を深める。臨床倫理に興味を持つ先生、これからの精神医療の担い手である若手の先生にも積極的に参加していただきたい。



7

統合失調症心理教育ワークショップ
～上手な診察の受け方のコツ（うけコツ）～

6月21日(金) 15:40-17:20 L会場(札幌コンベンションセンター 2F 207会議室)

司 会	(北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室) (東京大学医学部附属病院精神神経科)	橋本 直樹 市橋 香代
講 演 者	(福岡大学医学部精神医学教室) (国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院) (北海道大学病院精神科神経科／ YES-Japan (Young Epilepsy Section: 日本若手てんかん従事者部門)／ JYPO (Japan Young Psychiatrists Organization: 認定 NPO 日本若手精神科医の会) (医療法人フォスター生きる育む輝くメンタルクリニック Neo 梅田茶屋町／ 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾 患病態研究部／大阪精神科診療所協会) (岐阜大学大学院医学系研究科精神医学分野)	飯田 仁志 柏木 宏子 堀之内 徹 安田 由華 大井 一高
メインコーディネーター	(北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室)	橋本 直樹
サブコーディネーター	(東京大学医学部附属病院精神神経科)	市橋 香代

本ワークショップでは、「統合失調症薬物治療ガイド 2022」をもとにした心理教育プログラム「上手な診察の受け方のコツ（うけコツ）」を経験していただきます。プログラム自体の所要時間は1時間で、患者・家族を含めた多職種支援者が単回で実施することを想定しています。テキストをもとに読み合わせ形式で進めます。本ワークショップの対象者は今後このプログラムを実施していただく可能性のある支援者です。本ワークショップのねらいは、支援者として心理教育プログラムを実施していただける方を増やすことです。本プログラムを通じて、医療利用者へのガイドライン普及が進み、精神科医療における共同意思決定の実現に近づけることを期待しております。ご参加いただいた方のうち希望者と講師が壇上でデモンストレーションを行いますので、今回はまずその概要をご覧くださいと思います。

8 措置診察実践セミナー（平成30年ガイドライン・令和5年法改正準拠）

6月22日(土) 8:30-10:10 L会場(札幌コンベンションセンター 2F 207会議室)

司 会	(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所) (千葉大学大学院医学研究院精神医学)	藤井 千代 新津 富央
講 演 者	(千葉県精神科医療センター・医療法人学会木村病院) (千葉大学社会精神保健教育研究センター) (千葉大学医学部附属病院精神神経科)	平田 豊明 椎名 明大 鈴木 陽大
メインコーディネーター	(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)	藤井 千代
サブコーディネーター	(札幌医科大学医学部神経精神医学講座)	田所 重紀

精神保健福祉法における措置入院制度は1950年に制定されて以来根本的な見直しが行われることなく現在に至っている。その結果、措置入院の運用実態には大きな地域間格差が生まれている。厚生労働省は2018年に「措置入院の運用に関するガイドライン」を通知した。しかし、措置入院の要件である「精神障害による自傷他害のおそれ」の判断基準については議論が十分でないうえに、その判定を担う精神保健指定医に対する教育訓練が体系的に行われているとはいえないのが現状である。そこで、本ワークショップは主に若手精神保健指定医に対し、措置入院制度の要諦及び措置診察手順に関する知見等を効率よく伝え、参加者が今後適切な措置診察を実施できるよう教育することを目的とする。本ワークショップでは、これまでの精神保健医療福祉の歴史や精神保健福祉法の法的枠組等を踏まえつつ、最新の精神科診断学及びリスクアセスメント技法に基づき、措置診察において被診察者の精神障害による自傷他害のおそれをどのように判断するかを教授する。具体的には、措置入院制度の現在の位置づけと課題、ガイドライン制定時の論点整理といった他では聞くことの難しい内容を措置入院制度改革に中核的に関わった演者が解説したうえで、標準化されたモデル事例を用いた措置診察のシミュレーション形式による演習及びグループディスカッションを行い、参加者が適切な措置診察を実施できるようサポートする。また措置入院に関する診断書の書き方も伝授する。さらに措置入院後の治療や措置入院とならなかった患者のその後の処遇、医療観察法制度との棲み分けなどの話題にも触れ、参加者が措置入院制度を多元的に理解できるよう支援する。なお、本ワークショップは2022年及び2023年に千葉大学社会精神保健教育研究センターで実施され好評を博した同名セミナーの内容を発展させたものである。



9 そこが知りたい！ 刑事精神鑑定のコツ（司法精神医学研修委員会）

6月22日(土) 10:45-12:25 L会場(札幌コンベンションセンター 2F 207会議室)

司 会	(東京都立松沢病院精神科) (東邦大学医学部精神神経医学講座)	今井 淳司 山口 大樹
講 演 者	(島根県立こころの医療センター) (東京武蔵野病院) (愛知県精神医療センター) (鹿児島大学医学部保健学科) (医療法人社団新新会多摩あおば病院) (神奈川県立精神医療センター)	高尾 碧 崎川 典子 中岡 健太郎 赤崎 安昭 中島 直 田口 寿子
メインコーディネーター	(神奈川県立精神医療センター)	田口 寿子
サブコーディネーター	(東京都立松沢病院精神科)	今井 淳司

刑事精神鑑定（以下、鑑定）は、かつて限られた一部の精神科医が実施していたが、2005年に医療観察制度が、2009年に裁判員裁判制度が開始されてから鑑定件数が激増し、鑑定に従事する精神科医の裾野は広がっている。一方で鑑定では、一件記録の活用法、面接の進め方、鑑定書の書き方、診断や精神障害の犯行への影響に関する説明の仕方、法廷で証言する時の心がまえや鑑定結果の提示方法、など、日常臨床とは異なる技能が求められる。そのため、特に鑑定を始めたばかりの精神科医はとまどうことも少なくないだろう。鑑定に必要な技能が習得されていないと不十分な（あるいは誤った）鑑定になり、法曹による刑事責任能力判断が正しく行われず、被疑者・被告人の刑事処遇を誤った方向に導くおそれもあり、鑑定に取り組む精神科医には、鑑定に必要なスキルを高めることが欠かせない。

司法精神医学研修委員会は、鑑定に関する研修会を毎年2回開催し、学術総会でもシンポジウムやワークショップを実施してきた。今回の学術総会では、「教科書などでは得られない、鑑定のコツ、ベテラン鑑定人の工夫のようなものを知りたい」という声を受けて、フォーラム形式でのワークショップを企画する。具体的には、模擬鑑定人1名（高尾）、質問者役2名（崎川、中岡）、鑑定経験の豊富な3名（赤崎、中島、田口）の精神科医が登壇する。前半は、模擬鑑定人が受託から法廷での尋問までの鑑定の流れを提示し、その節目ごとに質問者役から特に鑑定の初学者が抱くであろう質問をする。鑑定経験が豊富な3名の精神科医は、その質問に答えながら、それぞれが鑑定時に心がけていること、困難な場面での工夫や「コツ」などを伝授する。後半は、フロアも巻き込み、参加者全員で鑑定手法に関する理解を深めたい。初学者からベテランまで、鑑定に関心を持つ会員のスキルアップの場となるよう、多くの参加を期待している。

映像で学ぶ初診面接—薬物療法を拒む / 望まない患者編—
(精神療法研修委員会)

6月22日(土) 13:15-14:55 L会場(札幌コンベンションセンター 2F 207会議室)

司 会	(慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室) (京都府立医科大学精神医学教室)	菊地 俊暁 南澤 淳美
講 演 者	(原田メンタルクリニック) (大正大学臨床心理学部) (東京都立松沢病院精神科) (国立病院機構九州医療センター精神神経科 / 合併精神センター / 臨床研究センター)	原田 誠一 新村 秀人 今井 淳司 田中 裕記
メインコーディネーター	(東京都立松沢病院精神科)	今井 淳司
サブコーディネーター	(慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室)	菊地 俊暁

精神科臨床において、「薬物療法を拒む / 望まない患者」には、まれならず遭遇する。患者の主体性、自律性を最大限に尊重するのが精神療法の基本ではあるものの、患者の利益のために服薬行動へ誘導したり、非同意下での薬物療法が必要な状況もある。特に、精神科専門医取得にあたって「経験すべき治療形態」とされる「救急」や「行動制限」を必要とする治療場面では、服薬を巡る介入は不可避である。また、これらの患者の状態像や服薬拒否の理由は、「薬自体をなるべく避けたいから」といった了解可能なもの、被毒妄想や精神病性の拒絶に基づくもの、など様々であり、経験を積んだ精神科医であっても介入には苦慮することと思われる。よって、これらの患者に対する精神療法的接近は、全ての精神科医にとって必須かつ深遠なテーマだといえる。近年、患者と医師が共同的に語り合い治療内容を決める共同意思決定 (Shared Decision Making : SDM) の考え方が広まり、尊重と信頼に基づく関係性構築により病識の乏しい患者へ介入する LEAP (Listen, Empathize, Agree, Partnership) といった介入法などが紹介されている。他方、このような患者に対する介入を、具体的な面接を通じ解説する実践的な学習の機会には少なかった。精神療法研修委員会では、「映像で学ぶ初診面接」と題し、異なる精神療法を専門とする精神科医による模擬患者に対する精神科外来における初診面接を映像で紹介し、解説・講義を行うワークショップを開催してきた。今回は、それぞれ認知行動療法、森田療法、動機づけ面接を背景とする原田、新村、今井による「薬物療法を拒む / 望まない患者」に対する外来初診模擬面接を通じ、このような患者に対する精神療法的関与を深掘りする。参加者の、「明日からの診療」に役立つワークショップとしたい。



Leaders Round Table 各国精神医学会リーダーの話し合い (国際委員会)

6月21日(金) 15:40-17:40 E会場(札幌コンベンションセンター 1F 104+105会議室)

司 会 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科精神行動医科学) (NTT 東日本関東病院)	高橋 英彦 秋山 剛
シンポジスト (President - Elect, American Psychiatric Association (President: May 2024-)) (President, Royal Australian and New Zealand College of Psychiatrists / Coordinator - General, The Office for Mental Health and Wellbeing, ACT Government) (President, Taiwanese Society of Psychiatry) (Taiwanese Society of Psychiatry / Resonance Psychiatric Clinic, Taiwan / National Taiwan University Hospital, Taiwan) (Director, Social Responsibility Committee, Korean Neuropsychiatric Association)	Ramaswamy Viswanathan Elizabeth Moore Jen-Pang Wang Chih-Yun Hsu Chan-Seung Chung
メインコーディネーター (NTT 東日本関東病院)	秋山 剛
サブコーディネーター (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科精神行動医科学)	高橋 英彦

背景 日本精神神経学会は、年次総会において、海外からの参加者を交えて、Leaders Round Table 企画を行い、各国学会の状況に関する情報収集、および日本精神神経学会が行っている活動についての助言をうるなどの話し合いを行ってきている。2023年の横浜総会では、アメリカ精神医学会、オーストラリア・ニュージーランド精神医学会、台湾精神医学会、英国王立精神医学会の代表と日本精神神経学会の出席者によって活発な討論が交わされた。2024年の札幌総会においても、Leaders Round Table の話し合いを継続したいと考えている。今回からは、韓国精神医学会の代表にも、日本精神神経学会総会への参加を呼びかける予定である。目的札幌総会への、各国の参加者と日本精神神経学会側の参加者の間で話し合いを行う。主なテーマは、各国の精神医学会における最近の動向に関する情報交換と、日本精神神経学会が行ってきている国際活動に対する助言である。この話し合いによって、日本精神神経学会の国際活動の方向性について、貴重な情報が得られるものと期待される。